随筆　モンローと乃木大将

早坂七緒

日露戦争百周年だそうだ。日本がロシアと戦争した、なんて、四〇年前に人類が月に降り立ったのと同じように、どこかうそっぽい感じさえする。ついでに想像をたくましくして、うそっぽい説を唱えてみたい。

十年ほど前にチェコのフラニーチェにある、旧オーストリア陸軍上級実科学校をたずねた。辺鄙なところなのに、その兵営をすでに乃木大将が視察していた。そのことを『白塔』（七号）に書いたことがある。当時はろくに調べもせずに「日露戦争直前に視察に訪れたらしい」なんて勝手に憶測していた。その後、記録にあたってみると乃木大将が視察したのは日露戦争がとうに終わった一九一一年七月十二日、つまり殉死のほぼ一年前、英国国王ジョージ五世の戴冠式に列席したのちヨーロッパ漫遊をしながら帰国する途次のことだったとわかった。

乃木大将のことはよく知らないが、明治天皇に殉死したことぐらいは知っている。なんでも西南戦争で旗を奪われたため死んでお詫びをする機会を、延ばし延ばしていたところ、天皇薨去をとらえて果たしたのだとか。よくわからない理由である。とくに興味もないので放っておいた。その謎がひょんなことから解けたような気がしたのである。

マリリン・モンロー主演の『王子と踊り子』という映画（一九五七年）。舞台は一九一一年のロンドン。ジョージ五世の戴冠式に参列するためこの地にきたカルパチア王国の王子の摂政（ローレンス・オリヴィエ）が踊り子マリーナ（モンロー）を見初め、公邸に呼ぶ。彼女はなぜか皇太后に気に入られて、戴冠式の朝、侍女頭として式に参列することになる。話は、なみのオペレッタ作家もボツにするような荒唐無稽だがどうでもいい。とにかく可愛らしいマリリン・モンローが、あのウェストミンスター寺院で戴冠式に参列したのである。奏楽がはじまり、モンローは分厚い「式次第」を操る。「詩編」「聖油塗布」から始まり、つぎに王の徴がひとつひとつ授与される。「黄金の拍車」「宝剣」「宝珠」「指輪」「笏」「戴冠」「God save the King George V」という段取り。侍女頭の席からは、仕切りがなかば邪魔をして実際の戴冠の様子までは見えない。が、映画は賛美歌とモンローの表情を交互に映してゆく。左の頬に涙。右の頬に涙。そして「God save the King George V」とともにモンローの顔は感激に輝き、涙は両頬に流れるのである。

さて同じ場にいたはずの乃木大将はどうだったろう？　モンローのように感涙にむせんでいただろうか。随行員吉田豊彦陸軍中佐の記録によれば「本日Westminster Abbeyに集マリシ者無慮六千人ト註セラレ金色燦然其美麗ナルコト筆紙ニ絶セリ」（乃木希典全集下）とあるから、その荘厳さに圧倒されたのは間違いないだろう。だが日露戦争の英雄が、ロンドンの踊り子のように感激するわけはない。やっと一等国の仲間入りをしたよ

うなつもりで参列した陸軍大将の腸（はらわた）は煮えくりかえっていたにちがいない。

「英吉利（エゲレス）国王がなんぼのもんじゃない。たかが千年前のハノーファーの土候の末裔じゃろうが。わがスメラミコトは、おまえたちとはまるで違う。わからんのか。」わからせるには、どうしたらよいか。さきのヴィクトリア女王が死んだときに、侍女のひとりでも殉死したか？（以上は推測である。当時の乃木の日記は残っていない。なお念のため。これは筆者の意見ではない。むしろハノーファ家の出自を公認している英王室のフェアさを評価している。）

さよう。乃木大将の殉死は、日本の皇室を別格にするためのデモンストレーションであったというのが筆者の仮説である。

「帰途群衆ハ東郷、乃木両大将ヲ視或ハ「フーラー」ヲ叫ヒ或ハ手巾ヲ振リ盛ニ歓迎ノ意を表シタルハ愉快ナリシ」と吉田が記しているから、乃木大将は日露戦争の英雄としての自分の知名度がかなりのものであることを確信してもいただろう。そもそも「軍旗を奪われた」お詫びならば、妻静子まで殉死するには及ばない。ペアで天皇に殉死することが肝心だったのだ。つまり殉死のための殉死である。軍旗云々は、むしろ共に殉死しないであろう二歳年下の東郷にたいする思いやりから書いたのかも知れない。「追々老衰最早御役に立の時も無余日候折柄此度の御大変何共恐入候次第茲に覚悟相定め候事に候」と遺言条々にあるように、六二歳の命を、世界のなかの日本の地位のために（乃木の意識では）有効利用したのである。

ところが当時の反応は散々だったようだ。「朝日（新聞）の社内では社長から記者、印刷工に至るまで「馬鹿なやつだ」と嘲笑した。」とか。さらに「政府は外国への説明に困って「発狂自殺せり」と発表しようかと考えたりしたほどであったが…」とある（高島俊男。週刊文春六月二十四日号）。とんでもない。乃木としては、正気で天皇に殉死した、と諸外国に報道されなくては、死んでも死にきれないはずだ。そのために死んだのだから。

「どうでもいい国、日本」ということを、数年間ヨーロッパに住んだことのある人ならよく分かると思う。これはけっして留学経験者の自慢ではない。あっさり原爆を落とされるような国と国民の評価が問題なのだ。祖国を軽視されたくはない。とはいえ実態はたしかに、おそまつな国である。国の実態を変えることも、評価を変えることも、匹夫にできることではない。乃木希典は、できることをした。日本の内部を全宇宙としてそこで一生をおえて恬然としている人には、「発狂自殺せり」以上の発想は不可能だろう。乃木の真意がわからないのが、グローバル化していない日本人の限界だ。嘘でもいいから「忠臣乃木将軍が妻と共に明治天皇に殉死した」と世界に報道してもらいたかったのに。乃木希典の辞世の句を記しておく。

神あがり　あがりましぬる　大君の
みあとはるかに　をろがみまつる
うつし世を　神さりましし　大君の
みあとしたひて　我はゆくなり